
彼女を殺したのは誰なのか?

NagiSa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女を殺したのは誰なのか？

【ZPDF】

Z8061M

【作者名】

Nagisa

【あらすじ】

夏休み、親戚の経営する旅館で彼女は死んだ。

彼女を殺したのは、誰なのか？

白い砂浜に煌々と照る太陽が反射して眩しい。海の青は深くて深くて、飲み込まれそうだ。今年もまた、ここへ来てしまった。ここに来る季節が来てしまった。

「夏だー！」

今僕と有夏は、僕の親戚が経営している旅館がある島に来ている。その旅館に来る者以外はいよいよ小さな小さい島だが、その分ほぼ貸し切り状態で大自然を満喫できるのだ。

毎年、知り合いや親戚のみが呼ばれる一週間がある。僕は毎年参加していたので、もうこの島のことは殆ど分かっている。有夏も一年前この旅館に呼ばれていた。その時に僕を見て一目惚れしたそうだ。去年は旅館の女将をやつて親戚に、高校に入学したことを見せて喜ばせるために制服を着ていた。そこから、僕がどこに高校かを割り出して共通の友達を通じて彼女から連絡してきて、今に至る。

「勇斗、早く海入ろうよー！」

有夏が僕の腕を引っ張り海へと連れて行く。長身で細身の彼女は惜しむこともなく素肌を白昼に晒す。日の光が当たることを知らないかのように透き通る白い肌が、淡い桃色の水着と綺麗な対比をしている。セミロングの髪は後ろで纏め上げられ、元気に動き回つても有夏の邪魔をすることはない。有夏は、高校生にしては少女の名残が残るその顔をこちらに向けてきた。頬は不満そうに膨れている。「どうしたの？ 全然楽しそうじゃないじゃん！」

「あっ、いや、そんなことないよー！」

有夏の水着姿を見つめていて話をほとんど聞いていなかった。彼女は、精巧に作られた人形が生気を帯びてそのまま動き出したかのよつに可愛い。

「……なあに、そんなに私のこと見つめて。恥ずかしいじゃない

「いやいやいや違つ違つ…」

有夏は思ったことをすぐに口にする。僕は赤面しながら顔を右下に背けた。

「じゃあ早く海に入る…」

そう言つて有夏は僕の深いところへと背中を押していった。臍の上まで水に浸かった。太陽の熱で暖められていた体が海の冷水に冷やされていく。しかしそれとは裏腹に、腕に抱きついている有夏のことを考えると気持ちは熱くなつていいく。

今日の僕は浮かれすぎている。

雲行きが怪しくなつてきたので、海水浴を終えて私服に着替え、旅館に戻つた。旅館内は和風一色で、床や壁に使われている木材は常時特有のいい香りを漂わせている。料理場の横を通り過ぎると、海鮮のいい匂いが。こればかりは幼い頃から感想を変えることができない。

この一週間はたまにしか会えない親戚とも会えるいい機会だ。勿論親戚だけが招かれている訳じゃないので、僕が知らない人たちの方が多いわけだが。その前に、有夏と一緒に部屋で寝泊まりするなんてこれ以上の幸せはない。

弾みながら隣を歩く有夏が、廊下の先を見て立ち止まつた。僕もそちらに目をやる。一組の男女が喧嘩をしていた。空氣から察するに、深刻な雰囲気の喧嘩だ。

「……よく聞き取れないね」

有夏が呟いた。ここからじゃこの長い廊下の先の会話は聞き取ることができない。

「全く、喧嘩は他所でやれよ」

折角の旅行なんだから気楽にさせてほしい。あらうとか、自分

達の部屋へは喧嘩をしている個所を通り過ぎなければ行けない。仕方がないので気付かないふりをして通り過ぎることにした。しかし、ある程度近づいたところで女の方がこちらに気付いた。険悪な顔をしてこちらを一瞥し、男に何かを告げると去つていった。男は一言悪態をついた。

「ふざけやがつて……後で泣いてもしらねえからな」

男は僕と有夏を交互に見た後、女とは反対の方向へ去つていった。僕達は何も見なかつたことにしてその場を足早に通り過ぎた。

部屋に着き壁の時計を見ると、もう夕方の六時になつていた。この宿にはいい温泉があるので、そこに行かないかと提案した。

「有夏、温泉に入らない？」

「えつ、混浴！？ やあだなあ、もう！ 勇斗は変態なんだから」

有夏は冗談っぽく笑い、からかつてきた。

「いや、そこまでは言つていないよ」

「本当は入りたいんじゃないの……？」

有夏が身を前に乗り出して誘つてきた。彼女と一緒に入りたいのはやまやまだが、一田田から頑張りすぎると一週間体力が持たない。

「からかうなよ。天氣も悪くなりそうだし、露天風呂は先に入つていた方がいいと思うんだ」

「ざーんねん。窓の外を『ご覧？ もう若干雨降つてるよーだ』

有夏に言われるまま窓の外を見ると、確かに若干雨が降つていた。夏この島は天氣が変わりやすいから、雨が続いてもすぐ止むだらうと思い、露天風呂は後日にすることにした。どうせ時間はあるのだ。

「そうか。じゃあ、夕食の時間まで何しようか……」

「私がお土産屋さん見てくるねー」

「一田田からもうお土産かよ」

有夏は人の話を聞かずすぐに部屋を飛び出していった。僕は疲れていたので少し睡ることにした。まだ布団は敷いていなかったので、窓際の椅子に腰かけて睡つた。

扉が開く音がして、僕は目を覚ました。ゆっくりと身を起こすと、有夏がさっそく食べ物を買ってきていた。

「おかえり」

「うん、ただいまー！」

瞼を擦つて時計を見ると、六時五十分。夕食を予約した時間まであと十分だ。

「有夏、食事に行こう」

「あ、もう夕御飯の時間なんだ」

部屋の戸締りをして大食堂へと向かった。途中木の匂いに混じつて妙な臭いのするところがあつたが、気にしない事にした。

大食堂では基本的に、食事を予約した客全員が一緒に食べる。そこで親戚同士は話をしたりするのだ。

「あら勇斗君、久しぶり」

女将が食堂で食事を並べていた。ふと有夏を見ると、妬いた顔をして頬を膨らませている。それがまた可愛くて胸の奥が熱くなつた。

「女将さん、元気にしてましたか？」

「ええ、おかげさまで。そちらの子はどなた？」

女将は有夏を見てそちらに話を振つてきた。

「あ、私、常海有夏つて言います。勇斗の彼女やつてます！」

女将はそれをみて微笑ましそうな顔をして有夏と握手した。

「勇斗君も、大人になつたものねえ。去年は高校の制服も見せてくれちゃつて。あら、夕食の時間だわ。さあ、席について」

女将に誘導されて席に着いた。すでに他の客も集まつていた。喧

嘩をしていたあの男女の姿は見えなかつた。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。どうぞ一週間お楽しみください。なお、明日の船は天候によつては出ない可能性がありますのでご注意ください。」

女将の話もそこそこに、夕食を食べ始めた。こここの料理は新鮮な海の幸を腕のいい料理人が調理しているのでおいしい。海鮮の料理に関しては右に出る者はいないだろう。

有夏も口いっぱいに料理を詰め、おいしそうに食べている。僕の視線に気付くと、食べていた鮪の刺身を僕に差し出してきた。

「はい、あーん！」

「ば、皆見てるだろ、そういうのは……」

「なに、そういうのは後にしろって？ 分かったわ、その為にこつき食料を買ってきましたからね」

「違うつて！」

大きな声を出してしまつて、何人かにこすりを見られた。その中には親戚もちらほらいて恥ずかしかつた。

食事も終盤に差し掛かり、先ほど廊下で喧嘩をしていた男女はなおも現れなかつた。女将もさすがに心配になつたのか、部屋へと探しに行くことにしたようだ。

僕達は他の者より先に食事を終え、席を立つた。食堂にいた旅館の人によちそうまを言ってから食堂を出た。

廊下を歩いていて、また先ほどの妙な臭いが微かに感じられた。廊下を進むにつれて不気味な臭いへと変わっていく。長い廊下の曲がり角を曲がると、少し先に女将が倒れていた。

床に倒れたまま、何かに怯えたように部屋から後ずさりとしない。

「どうしたんですか！？」

「あ、あ……か、いや、か……」

何が起こつたというのだ。気が付けば臭いはより強烈な物へとなつていて。この匂いは、そう、まるで腐つた血肉のようだ。

「勇斗！」

僕は咄嗟の判断で部屋の中へ足を踏み入れていた。途端、息をしていられないほどの刺激臭がした。ゆっくり歩を進めると、雨が窓を打ち付ける音に混じって滴が落ちる微かな音が聞こえた。奥に進むにつれその音ははつきり聞こえてくる。

足の先が液体を踏みつけてピチャリという氣味の悪い音がした。床には赤い水溜りができていた。確かめずともわかる、血だ。その血は奥からゆっくりとこちらへ染み出していた。まるで、行き場を失った怨念が助けを求めるかのように。

僕は思わず後ずさり、血の池に入らぬよう回り込んで部屋の奥を覗き込んだ。

「……な、何もない……？」

そこには血溜まりがあるだけで、何もなかつた。仕方がないので出来るだけ血を跳ねないようにゆっくり部屋の中に入つた。周りを見回す。何も、無い。

ふと、何かが頭に当たつて、ぐぢゅりという蛙を踏みつぶしたような氣味の悪い音がした。何かがあるのでないかと、恐る恐る上を見上げた。ゆっくりと、ゆっくりと。

「なつ……！」

先ほど喧嘩をしていた女性が天井から僕を睨んでいた。

「あああっ！」

部屋と部屋の間の襖を滑らすためにある段差に躊躇って、前の倒れこんでしまつた。血が体に滑り着いてくる。焦つて立ち上がりふとしたらまた転んだ。

その音を聞きつけて有夏が部屋の中に入つてくる。

「ど、どうしたの勇斗！ え……？」

有夏もこの惨状を目の当たりにしてしまつた。改めて天井の女を見る。よく見るとその女には右目がなかつた。さらに体は血がすべて抜け落ちたように真っ白だつた。そこで、彼女が既に死んでいることを把握する。しかし、死んでいるのは間違いないが彼女は僕を

睨むのをやめなかつた。

そして、あるつことか最悪のタイミングで停電が起つた。

僕は今旅館の大浴場に使つてゐる。あの後何とか予備の電源で電気を付けた後、僕は血まみれの服を女将に洗濯してもらつことになつた。

あの死体の処理がどうなつたのかは分からぬ。雨は勢いを増していく、嵐にまで持ち込んでいた。そういえばニュースで台風が近づいていると言つてゐた。ここらは家とは違つ地域のことなので、完全に盲点だつた。

「誰が……、誰が彼女を殺したんだ……？」

独り言を呟いた。皆恐怖から部屋に閉じこもつてしまつたのか、誰もいない大浴場に僕の声だけが響いた。ふと窓の外に目をやつて、女性が笑いながら立つてゐるよつに見えた。慌てて首を振る。次見たときには消えていた。そうだ、今日は色々なことが起つりすぎて疲れたいのだ。

この悪天候だから警察もこの孤島には来ることができず、明日まで保留ということになつた。しかし怪しい人物がいる。あの時女性と喧嘩をしていた男だ。後で泣いてもしらねえなどと言つてゐた。おそらく復讐の為に殺したのだろう。

だがだとしてもそこまでやるか？ それだけ疑問が残る。非常に獵奇的な死体だつた。

いつたん沈んだ気持ちをリセットするために湯船に頭まで沈めた。しかしそれは隣から聞こえてきた音で中断された。

大浴場は男風呂と女風呂を板で区切つてあるだけなので、お互の音は聞こえるよつになつてゐる。その音は女風呂からだつた。

「やめつ……！ 誰があつ！ 誰があぐつ……！」

知らない女性の声と、肉が裂ける音がした。僕は背徳的な気分になりながらも、仕切りの板の下から覗いてみた。予想通りタイルに血が散っていた。だが、妙なのは足が一本しかなかったことだ。今襲われている女性と襲っている人間がいれば足は四本のはずなのに。僕はその場で固まってしまった。

しかしそんな僕とは違つて女風呂は何も止まらない。お湯の中に落ちる音がした。そのあとから、タイルをぬるぬるした足で歩くペタペタという音が嫌に耳に着いた。

「いや、いやつ！ いやああああつ！」

再び肉を切り裂いた時の音がした。今度は一度ではなく何度も、何度も。やがて、女性の悲鳴も聞こえなくなった。何故かホツとして胸を撫で下ろした。

直後、仕切りの上の隙間から腕が一本落ちてきて、ペチャリと音を立てて潰れた。

「ツ！」

次にもう片方の手、両足、下半身、上半身、生首と、次々にべちゃべちゃべちゃと音をたてて落ちてきた。

「キヤアアアアアアツ！」

落ちてきた肉片に驚き動けないでいると、別の女性の悲鳴が聞こえた。声の主は有夏だ。その後女将の声がした。

「こ、これは……でも、体はどこへ……？」

おそらく血の跡で驚いたが、肉体はこちらへ来てしまつているので探しているのだろう。僕は震える声をあげて一人を呼んだ。

「お、女将さん、有夏、体は……こっちに飛んできました」

「勇斗！？ 大丈夫なの！？ どうしたの！？」

「勇斗君、今そちらに行くからね！？」

それから次の日になつて、まだ嵐は止まなかつた。なんて申し合わせたタイミングか、そのせいで警察が来ることはできなかつた。怯える僕達に追い打ちをかけるかのよう、今日も既に一人の女性が犠牲になつた。

僕達は部屋から出ずに引きこもつていた。有夏が思い出したようにぽつりと語りだす。

「ねえ勇斗、この宿で二年前高校生の少女が殺された事件、知つてる?」

初耳だ。女将からそんな話は聞かなかつた。

「私ね、今まで四人を殺したのは、二年前殺された少女の靈だと思うの。だから、犯人を探して殺しまわつてはいるんだわ」

普段ならくだらないと一蹴するような話だが、このような状況だ。やけに現実味を帯びていた。有夏が悲しそうに呟いた。

「だとしたら、誰なの……? 誰が二年前、彼女を殺したの? こんなのは、許せないよ……私は知りたい。彼女を殺したのは誰なのか

……

それは脆いようで強い意志を持つた言葉だった。

しかし現実はそんな彼女を嘲笑うのようだつた。僕の彼女は、有夏は、その日の晩死んだ。目も当てられない程残酷な死体で、それを見た女将は声も上げられずその場に崩れ落ち震え続けた。

僕が食事を取りに外へ出ていた間のことだつた。もう、どうにでもなれと思つた。僕の世界は今年の夏で終わつたんだ。世界は今日で止まつたのだ。

それは、久しぶりに部屋から出て戻してもなくふらふらと宿の中を歩き回っていた時のことだった。やけに静かなのだ。まるで、本当に誰も生きていなかのようだ。その代わりに、腐臭がする。そう、有夏が発していたものと同じような。

吐きだしそうになるのを抑えて進む。すると、廊下の先に動く物を見つけた。女将だった。

「…………勇斗君」

「一体、何があつたんですか？ 誰も、いない…………」

女将は目を右下に伏せ震える声で言った。

「皆、死んだわ。従業員達は食事に毒が盛られて…………でも、あまり思い出せない」

やはり、皆死んでいたのか。不思議と恐怖や恐れの類は浮かんでこなかつた。

「…………思い出したわ」

「どうしましたか？」

「…………今の、私じゃない」

その声を発したのは、女将ではなかつた。声がした方を向く。廊下の先に、血塗れの服を着た女性が浮かんでいた。

「キヤアアアアアアアッ！」

女将が叫び声をあげて走り出した。僕はそれを追いかけ走り出す。何かはわからないが、背後の女性からは禍々しいものを感じる。廊下を曲がり、女将は厨房に飛び込んだ。僕が角を曲がった直後、背後の女性が壁にぶつかってグロテスクな音を発した。

「…………止まつた、か？」

直後、女性が半分潰れた顔をこちらに向け、再び襲いかかってきた。慌てて厨房に逃げ込むが、そこでは女将が腰を抜かして倒れていた。それに躊躇して僕も転ぶ。

「や、ややつと、ととみつ、けたあ…………」

赤黒く変色した口から不明瞭な言葉を発しつつ女性は女将の上に

乗つた。

二
ひつ

「あ、なたが、わたしを……殺した人つ！」

女性が女将の首を締めあげるのを僕は黙つて見ていることしかできなかつた。しかし、不意に女性が力を弱めて女将を放り投げた。「で、でも、殺さない。あな、たはたつぶりと……たつぶりと、遊んであげる。それよりも」

女将は壁に叩きつけられて気絶した。女性はこちらを振り向いた。寄ってきた。血に濡れ蛆が湧いている手が僕の頬を撫でる。

「やつと、一人きりになれた勇斗。一年前、あなたが二二二に来た

時も私は犯人を探してた」

「でも、あんなのどうでもよくなっちゃつた。どうして、二二二で
だ。そして、彼女を殺したのはそこで転がつてゐる女将だ。

みんな殺しちゃえればあなたと二人きりで暮らせるんだもの」と

づけをした。

世界は、今日で止まった。腐臭漂う廃旅館の中で止まつたのだ。

(後書き)

慣れないホラーを「夏のホラー2010」の為に書いてみました。
だって、お祭り好きなんですよ。
しかしやはり怖さを出すのは難しいです。
書いている僕の方は普段通りまつたりです。
最後までお読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061m/>

彼女を殺したのは誰なのか？

2010年10月8日11時44分発行